

神戸北野異人館街の歴史

江戸時代（1603～1867）の間、日本は鎖国政策を維持し、ほとんどの外国との貿易、渡航、接触を厳しく禁止していました。この政策は 200 年以上続き、1858 年に日本と 5 つの西洋列強との間で安政条約が締結されることで終わりを迎えました。1868 年、神戸は外国貿易に開放された数港の一つとなりました。

当時の計画では、神戸の海岸に外国人が居住し働くことを想定した外国人居留地を設立することが予定されていました。しかし、江戸時代末期の混乱により、居留地は期限までに完成しませんでした。そこで政府は、生田川と宇治川の間周辺地域において、外国人が日本人市民と共に居住することを許可することにしました。多くの外国人は、後に北野町山本通地区となる山手地域に魅力を感じました。そこは外国人居留地の北に位置する魅力的な田舎の丘陵地で、なだらかな斜面からは港と海の景色が見えました。1880 年代から、ここはユニークな外国人居住区として発展し、北野異人館街として知られるようになりました。「異人」は「外国人」を意味する言葉で、「館」は「家」を、「街」は「地区」を意味します。

20 世紀半ばまでに、北野異人館街は 200 以上の洋風建築と和風建築を擁するまでに成長しました。この地区は日本人と外国人が調和して共に暮らせる場所として知られるようにな

りました。外国の影響は、技術的進歩とライフスタイルの変化ももたらしました：神戸の異人館街は、肉食文化、洋装、そしてゴルフの影響を日本で最初に受けた場所でした。

外国人の家は「異人館」と呼ばれ、ドイツ人のゲオルク・デ・ランデやイギリス人の A.N.ハンセルなどの優れた非日本人建築家の存在により、神戸の多くの家屋や他の洋風建築のデザインは非常に品質が高いものでした。同時に、日本のデザインと建築技術が西洋のものと組み合わせられ、多大な融合が起こりました。大工、左官、石工、屋根葺き職人は通常日本人でしたが、彼らは進歩的な「国際化された」技能を備えるようになりました。やがて、ベランダ、出窓、レンガの煙突、塗装された木製の下見板張りや漆喰の外壁などの共通の特徴を持つ「神戸異人館様式」が現れました。こうした建物は多くの場合、日本人の従業員にとってより快適な和風の翼部と接続されていました。

これらの洋風建築の多くは、第二次世界大戦による被害、戦後の開発、そして時の経過による劣化のために消滅しました。しかし、1960 年ごろに始まった保存活動が成功したおかげで、19 世紀から 20 世紀初頭に建設されたそのような建物の約 30 棟が今日も残っています。このことは、かつては活気に満ちていた外国人居留地の痕跡がほとんど残っていない横浜や長崎などの他の旧開港地とは顕著な対照をなしています。そうした理由などにより、北野異人館街の数多くの洋風住宅は、日本の、そして国際的な歴史文化の重要な一時代を物語る貴

重なる物的証拠となっています。